

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本の夏は夜になってもなかなか気温が下がらない。その暑さのなかで、火から光だけを切り離して花火という遊びに変化させたのは誰だったのだろう。人は火を大切に、火遊びは堅く禁じられてきた。その火から闇に光の花を咲かせて一瞬の美しさを楽しむのが花火である。

打上花火のことは、竹筒に火薬を詰めて、空に打ち上げ、雨乞いや疫病を祓うため、神にキガンしたことから起こったものだという。また花火の美しさとは無縁の、大きな音と高く飛ぶことの競い合いだったかもしれない。いつのころから火薬を巧みに調合して、光に色を加え、空いつぱいを彩る見事な花に仕上げたのだ。

それでも打上花火の音の大きさは、日常の音からかけ離れた大きさである。近くにいれば火薬の爆発による振動はずしんとみぞおちに響く。三つくらいところに、花火を見に連れて行かれた。遠くで、ドーンとなっているうちはよかつたが、近づくとつれてその音のすさまじさ、足がすくんで動けない。もつと前に行かなければ見られないと言われても、恐くて我慢できず泣き出してしまった。他の人たちは花火を見に行き、私だけは付き添いの人に連れられて家へ帰された。どんなに綺麗なものと、話されるたびに楽しみにしたのに、その悲しさつまらなさ、だが我慢できない恐怖感を身にしみて覚えた。

① それからというもの、花火は線香花火一本ばかり、その線香花火でさえ、火がついた火薬がじぶじぶいいはじめると、こよりの先を持っていられない。母は私に割りばしを持たせ先の方に花火のこよりを差し込んでくれた。随分、臆病な子供だったのだ。それでも火薬が燃えて赤い火の玉ができ、輝く赤い光のレース状の花がばらりばらりと闇に浮く美しさは何とも言えない。玉はひと花ごとにやせてゆき、周りに小さな光を弾き出して、ついに細い糸がすすい流れる柳に変わる。その細い光の流れ落ちる先に、こちらの目も吸い込まれ、手元の光も目を閉じるように消える。子どもの遊びとけなされるが、線香花火は、あのわずかひとすくいの黒い粉が見せる、光の繊細な美しさ面白さは、花火の原点ではないかと思う。

安い線香花火は、何本かひと束ねにして売られているが、全部キンイツにいい花が咲くとは限らない。丸い火の玉がまとまり切らないうちに、ぼとんと落ちる出来の悪い意気地なしのものもある。こんどこそ、このつきはと、全部終わってさて満足のゆくのは二、三本あれば上出来だ。せめて半々の成功があればと欲をいうのなら、電気花火にすればいい。あの明るいばかりで味のない光はつまらない。

やっぱり二、三本の満足でも、線香花火の方が楽しさとしては上質であろう。

花火だけではなく、火薬を包んでよつてあるこよりの端の色付は、赤い色に緑、紫、黄色と強い色が縞になっている。色の組み合わせからすれば、しつこくて野暮つたいはずなのに、それがかえってアザやかに見えるのは、夏の暑さのせいかな、火薬のもつ危険を含んだ美しさなのか。こよりという紙をひねって作る細い紐は、火にも水にも弱いくせに、この花火の命綱であり、遊び終わって地に捨てられ、翌朝掃き集めた塵取りの中に、昨夜の楽しさを思い出させる。

幼い日、あんなに恐れた打上花火だが、長い一生という時間のなかで、再び出合う機会に恵まれた。想像以上の人出である。隅田川の兩岸を人が埋めつくし、ほんとうにAもない。その人の波に、芋のようにもまれながら、ひと足ごとに打ち上げの時と場所に近づいてゆく期待感、人の数が増せば増すほど高まってくる。

あたりがいくらか暗くなつて、いきなり五、六発たて続けに打ち上げられ、きらめく光が広がった。どつと歓声がわき拍手が上がる。あとは川の上手下手から順よく打ち上げられていく。その美しさ見事に、初めは声を上げて喜んだが、やがて、ああ、というため息になった。色も美しい、形も工夫されている。組み合わせもよく考えられている。空に花笠を開いた大きさは、年々大きく、またきらきらと降る砂子は夢より美しい。右に走り左へ飛んで生きもののように動く光、どれも惜しくて引き止めておきたいのに、目に残像を結んだその時、光は消えている。

今年も何万発の花火が打ち上げられるかBもないが、花火ほどぜいたくな、そしてまた誰もが見える場所に立ちさえすれば、一銭の貯えもなしに楽しめるものはない。花見もいい、祭りもいい、だが夏の夜空に、それ以上はなばなく一瞬を飾るものはない。消える光の美しさは、何とはかなく名残惜しい。

(青木玉「上り坂下り坂」より。一部省略等がある。)

問一 傍線部 a～e のカタカナは漢字を、漢字は読みを答えなさい。

問二 A・B に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から選びそれぞれ記号で答えなさい。
ア 知るよし イ 目の付け所 ウ 返す言葉 エ 足の踏み場 オ 身に覚え

問三 傍線部①「それから」とあるが、どのようなことがあってからか。筆者の体験とその時の心情を踏まえて、四十字以上、五十字以内で答えなさい。

問四 傍線部②「線香花火の方が楽しさとしては上質であろう」とあるが、筆者は、線香花火の上質の楽しさを、連続する三つの文で具体的に描写している。この連続する三つの文を本文中から探し、一文目の初めの五字を抜き出さない。

問五 傍線部③「やがて、ああ、というため息になった」のはなぜか、その理由を説明した次の文の [] に当てはまる言葉を、本文中から三十五字で探し、最初の五字を抜き出さない。
 [] から。
 [] からの。

問六 本文で使われている表現とその効果について述べた文として適当でないものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。
ア 比喩表現を多く用いることによって、細やかな情景が眼前に広がるように描き出している。
イ 色彩の豊かな描写を散りばめることによって、視覚的な華やかさを印象的に表現している。
ウ 擬音語や擬態語を適所に配することによって、作品にいきいきとした臨場感を出している。
エ 主語を省略した表現を取り入れることによって、整然とした論理性をきわ立たせている。

二 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

期待

小海 永二

わたしは網をはって待っている

地に落ちて来る一切のものを

① 重い隕石の破片を

白雲の切れ端を

わたしは手にすくって眺めようとする
と消えてしまう

[] だけが掌に残る

にぎりしめることは 益々空しい

救い それは不在でない存在

喜び それは確実な存在

② わたしは待っている 網をはって

今度こそ確かな存在をにぎろうと

そしてわたしは信じている

必ずそれは実現すると

〔詩のわかる本 中学3年〕による

問一 傍線部①「重い隕石の破片を／白雲の切れ端を」とあるが、「重い隕石の破片」と「白雲の切れ端」は、どのようなものの象徴として用いられているか。最も適当なものを、次の中から選り記号で答えなさい。

- ア 「わたし」が手に入れたと思ったとたんに、たちまちなくなるもの。
- イ 「わたし」の成長にともない、自覚しないまま手に入ってくるもの。
- ウ 「わたし」が住む世界にはないが、いつの日か手に入れられるもの。
- エ 「わたし」の希望に反し、一部しか手に入れることができないもの。

問二 詩中の [] に当てはまる最も適当な言葉を、詩中から二字で抜き出しなさい。

問三 傍線部②「わたしは待っている 網をはって」には、比喩ともう一つの修辭法が用いられている。そのもう一つの修辭法を用いている短歌を、次の中から一つ選り記号で答えなさい。また、その修辭法を答えなさい。

- ア 山の上にてたてりて久し吾もまた一本の木の心地するかも 佐佐木信綱
- イ 流れゆく雲を一生のごとくみてあきらめ難く立ちあがりたり 島田修二
- ウ 月山に太るあけびらしんと霧吐く口をもちてしづまる 馬場あき子
- エ 土肥の海傍ぎ出でて見れば白雪を天にかけたり富士の高根は 島木赤彦

問四 この詩は「期待」という題名だが、作者はどのようなことを期待しているか。次の [] に当てはまるように、詩中の言葉を用いて、十字以上、十五字以内で答えなさい。

[] をつかむこと。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(一部表記を改めたところがある。)

①「むこうで樽井はサッカー続けるのか？」

派手な(注)アロハのような長袖シャツを着た和樹が面倒くさそうに訊いた。
「わからん、いつてみないと」

樽井は引越しの作業の手を休め、黄色いポツポツの付いた真新しい軍手はずししながら首を横に振った。桜ヶ丘(注)FC時代に(注)ディフェンダーだった樽井は、ザルから水がこぼれるように、敵の選手に簡単に抜かれてしまうことから「ザルイ」とカゲでは呼ばれていた。
②小学生時代のチームメイト十三名はすべて同じ中学校の学区だったけれど、ディフェンスの樽井だけは父親の(注)a テンキンと共にこの土地を離れ、福島に引越していくことになった。引越しは入学式の数日前というあわただしさだったが、その日、チームメイトの多くは引越し準備中の樽井のマンション前に集まっていた。

「福島といえば、(注)Jヴィレッジがあんだろ？」

ひよろりと背の高い哲也が言った。

「うん、まだよくわからんが、けっこう家からも近いらしい」

人のよさそうないつもの笑顔で樽井が答える。

[I]

オッサは少し怒ったような声で言った。

[II]

[III]

長内陽介、ツウシヨウオッサがこだわった。

「おまえこそ、ゴールキーパー続けろよ」

樽井の言葉にみんなが破顔する。

「星川、それにオッサと尾崎、それ以外はみんな桜ヶ丘中サッカー部に入部の予定。オッサは野球部、尾崎は帰宅部。星川は(注)Jクラブだから……」

哲也はあごをしゃくするようにしてしゃべった。

「そうだ、そうだ、サッカー続けて、レギュラーになったら対戦しようぜ。鯨島とみたいにな」
眉毛の濃いシゲが笑った。

「それって全国大会ってことだろ、むりむり、そんなの絶対にあり得ないよ」

「卒業文集の将来の夢におまえ『サッカー選手になりたい』って書いてたじゃねえか」
同じクラスだったオッサが樽井に突っかかる。

「書いたよ」

樽井のクチモトはどうしても緩んでしまう。

「だったら続けるだろ？ ふつうは……」
④ オッサがむきになる。

「おまえ、夢の意味ってわかってる？ 夢っていうのはな、叶わないものなんだぜ。実現しなくてあたりまえなんだ。いいか、夢っていうのは99.9999パーセント夢で終わるんだ。だからこそ夢なんだろ。だから誰でもどんな夢だって見れるんじゃない？」

樽井はけら笑った。

遼介は黙ってふたりのやり取りを聞いていた。⑤ 人によって夢の捉え方は、ずいぶんちがうものだなと思った。卒業文集に書いた自分の夢。それはまったく樽井と同じものと言えた。でも自分にとっての夢、プロのサッカー選手になるという夢は、少なくとも実現しなくてあたりまえのものではなかった。実現させるための目標だった。ムロン、それは手の届かない次元という意味では、今は樽井と大差ないかもしれない。だけど、自分にとってのサッカーとチームメイトだった樽井にとってのサッカーには、ずいぶんと距離を感じた。それはそれで仕方のない話だということは知っている。⑥ でも、なにか、やるせなさのようなものが心に残った。

⑦ 「おまえみたいな下手糞でもさ、いなくなると、寂しくなるよ」

オッサが鼻を鳴らし、大きな丸い顔の小さな目をまばたきすると、⑧ 真面目な顔で言っとうつぶいた。

「オッサこそ、がんばってプロ野球選手になれよ」

樽井がおかしそうに、それでいて困ったような顔になった。

返事は返って来なかった。

(はらだみずき『サッカーボーイズ13歳 雨上がりのグラウンド』より)

(注) アロハ：アロハシャツの略。

FC：サッカーのクラブチーム。

ディフェンダー：守備を中心的役割とするプレイヤー。

Jヴィレッジ：サッカーを中心とした運動施設の名称。

Jクラブ：サッカーのJリーグの所属クラブ。

問一 傍線部 a～e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「むこう」とあるが、どこのことか。本文中にある地名を抜き出しなさい。

問三 傍線部②「小学生時代のチームメイト十三名」とあるが、このうち何名が桜ヶ丘中サッカー部に入る予定か。数字で答えなさい。

問四 次のア～ウの会話を I II III の順番になるように並べ、記号で答えなさい。

ア サッカーに決まってんだろ

イ 続けるよ……

ウ なにを？

問五 傍線部③「破顔」とあるが、どのような顔か。最も適当なものを、次の中から選び記号で答えなさい。

ア 怒った顔

イ 笑った顔

ウ 驚いた顔

エ 泣いた顔

問六 傍線部④「オッサがむきになる」とあるが、このときのオッサの気持ちとして、最も適当なものを、次の中から選び記号で答えなさい。
ア 別れが近づいてもにやついている樽井の様子が腹立たしい。
イ サッカーの才能がない自分は野球のことしか考えられない。
ウ 全国大会出場は無理だという樽井の考えを言い負かしたい。
エ 自分はサッカーをやめるが樽井にはこのまま続けてほしい。

問七 傍線部⑤「人によって夢の捉え方は、ずいぶんちがうものだなと思った」とあるが、樽井と遼介は夢をどのようなものだと捉えているか。樽井は十五字以内で、遼介は十字以内でそれぞれ、文中から抜き出しなさい。

問八 傍線部⑥「でも、なにか、やるせなさのようなものが心に残った」とあるが、なぜやるせなく思ったのか。三十文字以内で答えなさい。

問九 傍線部⑦「おまえみたいな下手糞」とあるが、樽井の下手糞な様子について具体的に描かれている部分を、文中から三十文字以内で抜き出しなさい。

問十 傍線部⑧「真面目な顔で言つてうつつむいた」とあるが、このときのオッサの気持ちを、三十文字以内で答えなさい。

四 次の文章は、平安時代後期の藤原宗輔という人物について書かれたものである。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

(注) すべて、蜂は短小の虫なれども、^(注)仁智の心ありと ^①いへり。されば、^(注)京極太政大臣宗輔公は、蜂を ^(注)いくらともなく ^②飼ひたまひて、「なに丸」「かに丸」と名を付けて、呼びたまひければ、^③召しに ^(注)したがひて、^(注)恪勤者などを ^(注)勘当したまひけるには、「なに丸、某刺して来。」とのたまひければ、^④そのままにぞ振る舞ひける。出仕の時は ^(注)車のうらうへの物見に、^(注)はらめきけるを、「とまれ。」とのたまひければ、^⑤とまりけり。世には蜂飼ひの大臣とぞ申しける。 ^(注)不思議の徳、おはしける人なり。

(一) 十訓抄

(注) すべて…一般的に

仁智…温かく賢い

いくらともなく…たくさん

恪勤者…大臣などに仕えた侍

勘当…こらしめること

車のうらうへの物見…牛車の両側の物見窓

はらめきける…乱れ飛んでいた

問一 傍線部①「いへり」を現代かなづかいに直して、ひらがなで書きなさい。

問二 傍線部②「飼ひたまひて」とあるが、「宗輔公」はたくさん蜂をどのようにして飼っていたのかを次のような形で説明したとき、
に入る適切な言葉を、本文中から五字で抜き出しなさい。

宗輔公は、たくさん蜂それぞれに お飼いになっていた。

問三 傍線部③の主語として最も適当なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 蜂 イ 恪勤者 ウ 宗輔公 エ 世

問四 傍線部④「そのままにぞ振る舞ひける」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 宗輔公の飼っていた蜂が、宗輔公に仕えていた侍の悪事を発見し、その侍を刺したということ。
イ 宗輔公に仕えていた侍が、宗輔公の飼っていた蜂の悪事を発見し、その蜂を処罰したということ。
ウ 宗輔公に仕えていた侍が、宗輔公の命令に従って罪を犯した侍を処罰したということ。
エ 宗輔公に呼び出された蜂が、宗輔公の命令に従って、宗輔公に仕えていた侍を刺したということ。

問五 傍線部⑤「不思議の徳」とあるが、筆者は、「宗輔公」のどのようなことを「不思議」であると考えているのか。現代語で答えなさい。

〔五〕 次の問い～問四の問いに答えなさい。

問一 次のア～オの傍線部の敬語について、使い方が正しいものを、次の中からすべて選び記号で答えなさい。

- ア 田中先生はどちらにいらつしやいますか。
イ あの絵をご覧になつてゐるのは、私の母です。
ウ 私はいただいたお菓子を召し上がりませう。
エ ご注文は何になさいますか。
オ 昨日父からうかがつた話は、とてもおもしろかつた。

問二 次の の中の文は、転校した友だちにあてた手紙文の一部である。この文の中には、言葉の使い方が適切でない部分がある。その部分を一文節で抜き出し、文が自然につながるように正しく書き直しなさい。

以前、修学旅行に行ったときのことを、みんなで話したことがありましたね。私は、最近、楽しかつたあの旅行のことを、よく思い出します。今の私の夢は、もう一度、みんなで旅行に行きたいです。ぜひ、実現させたいですね。

問三 「新記録」と同じ組み立ての熟語を、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 市町村 イ 冷蔵庫 ウ 飲食店 エ 大成功

問四 次の の中の漢字は行書で書かれたものである。この漢字の部首名をひらがなで書きなさい。また、この漢字を含む二字の熟語を楷書で書きなさい。

植

〔六〕 言葉を使って生活していくうえで、「話す」「聞く」「書く」「読む」ことはいずれも大切なことであるが、このうちあなたが生活の中で特に大切にしていきたいと考えることを取り上げ、理由も含め、次の条件に従って書きなさい。

《条件》

- ◇二段落構成か三段落構成の、どちらかで書くこと。
◇「題名」は書かないこと。
◇一六〇字以上、二〇〇字以内で書くこと。
◇文字は、正しく、整えて書くこと。